

ブランショとパンセについて¹⁾

On Blanchot and *Pensées*

高山 花子*

第1節 思考からパンセへ

ひとはいかにして思考するのか——20世紀フランス哲学、とりわけ1950年代、1960年代以降のフランスの哲学には、ハイデガーによるナチスへの加担を例とするような、第二次世界大戦の悲惨と残酷を顧み、理性の野蛮を問い返す潮流があり、これまでの哲学史を振り返りながら、新しい哲学のかたちを希求し、それを各々が批判的に展開していく動きがあったことを想起すると、フランスの作家・批評家のモーリス・ブランショ（1907-2003）とともに「思考（pensée）」について考えることは、哲学そのものがどのような営みであるのかを、哲学者研究とは違う角度からいま見るよい契機になると思われる。ブランショは、エマニュエル・レヴィナスやジョルジュ・バタイユとの交遊がよく知られているとはいえ、彼自身は哲学者ではなく、大学の教授システムとしてのアカデミアからは生涯一定の距離を保っていた人物であるが、とりわけ1940年代後半以降、ヘーゲルやニーチェをはじめとする哲学テキストへの言及が多くなる、といった説明では不十分なほどに、文学と哲学の境界をみずからの書く行為そのものによって問い直すように書き続け生きた人と言ってよい。それほどに、彼の記述の対象となる問題設定や読解対象は、主たる参照項として知られるマルルメヤカフカのほかに、同時代のフランス文学・戯曲の書き手であるマルグリット・デュラスやサミュ

* 東京大学特任助教

エル・ベケット、アンドレ・ブルトンだけでなく、英米文学のフォークナーやウルフといった外国語文学、さらには、はるかむかしのヘラクレイトスのような哲学者に至るまで、古今東西の哲学・文学テキストを縦横無尽に狩猟していた。

時評家として各種新聞・雑誌に連載をしたテキストの選集である『踏みはずし』(1943)、『火の分け前』(1949)、『文学空間』(1955)、『来たるべき書物』(1959)、『終わりなき対話』(1969)、『友愛』(1972)といった文芸時評集のほかに、虚構作品も少なからず残していたブランシヨの最初の小説『謎のトマ』(初版1941、新版1950)の終盤には、「わたしは考える、ゆえにわたしは存在しない (Je pense, donc je ne suis pas)」²⁾ という一文を主人公のトマが壁に書く場面があった。一読して想起されるのは、デカルトによる「われ思う、ゆえにわれあり (Je pense, donc je suis)」、すなわちコギト・エルゴ・スム (*cogito ergo sum*) という、極めて知られている哲学のフレーズであるが、それを転倒する形であるとはいえ、1941年の時点で発表されたブランシヨのテキストに、このように考える (*penser*) 行為を行う主体としてのわたし (Je) をめぐる問いが、哲学者の名前とともに織り込まれていたことは示唆的であるだろう。この背景には、哲学書を相当読み込んでいたことはもちろん、みずからの執筆の形式を変遷させ、ときに使い分けながら、いわゆるジャンルの区分を越えて、言語そのものの(不)可能性を生涯追求したブランシヨ自身の姿勢が透けて見えるように思われる。一言でまとめるならば、ブランシヨは「思考」を哲学の問題に限定して論じ直すということからは遠く離れて、よりいっそうひろく、冷徹に、けれども柔軟に、文学と呼ばれる領域にも敷衍される、言語そのものにつきまとう問題として考えていたように思われるのである。それでは、そのようなブランシヨは、どのようにして「思考」の問題を、各種文芸時評をはじめとするテキストや虚構的なテキストの中で探っていたのだろうか。本論は、以上のような問題意識から、ブランシヨとともに考える営為について考える試論である。

「思考」をめぐる問いを引き受けるにあたり、議論の地平をフラットにするために、そもそもフランス語で「思考」がどのようなものであるのかを確認しておこう。フランス語の「パンセ (pensée)」は、思考、思惟、思索、思想、考え、観念、といった風に、さまざまな日本語に訳されてきたが、字義通りに、「考える」を意味する動詞 *penser* の過去形に由来している点を勘案するならば、シンプルに、考えられたことを意味すると言ってよいだろう³⁾。なるほど、ときどき耳にする「論証的思考 (推論的思考、*pensée discursive*)」という表現に顕著なように、人文学における用語としての「思考」とは、一見すると、まずもって、哲学、哲学的思考、哲学研究と密接に関わっているように思われるのだが、一単語としてこの語が持つ意味は、思索された痕跡、あるいは考えるプロセスそのものなのではないだろうか。もちろん、そのように、言語による論証的な思惟としての思考が、推論であれ分析であれ、論理や論理学と強く結びつく形で古くから哲学の主題である状況は今日もなおつづいているのだが⁴⁾、そうしたなかで、哲学者ではないブランショによる思考に対するアプローチは、哲学の枠組みそのものを静かに根源的に問い返している点で、「思考」というその主題を、単語の意味の次元に立ち戻りつつ、ひろい文脈で柔軟に見る視座をあたえてくれるように思われる。哲学者、哲学、思考といった言葉自体が、どのようなものなのかを改めて見つめ直すヒントを与えてくれるように思われる。

そこで、この論文では、「思考」等と訳される *pensée* を基本的には「パンセ」として表記し、ブランショとともに「パンセ」について考えることをスタンスとする。前提にあるのは、文芸時評家としてのブランショの活動が、とりわけ戦後フランスの哲学と文学の双方が入り乱れる形での試行錯誤と連動していたことである。そうしたなかで、彼においては、「パンセ」が広く「ディスクール (言述)」の問題になっていた点に着目する。具体的には、ブランショの主要な文芸評論集である『終わりなき対話』(1969)の冒頭に収録された「パンセと不連続性の要請」(初出1963)に見られる、哲学と教

育制度の結びつきについての整理を読解し、ブランショが「パンセ」を「ディスクール」の問題としてみていた姿勢を確認する。結論を先取りするならば、そこにはっきり見て取れるのは、ブランショが、アリストテレスをはじめとする論理学の哲学者にも「不連続性」が見出され、「断片」に代表される形式が「パンセ」の形成に作用しているという論点を主張していることである。この「パンセと不連続性の要請」の主張にもとづきつつ、ブランショ自身の当時の記述が、「論」と呼ぶことが簡単ではない会話体や断片形式の独自のスタイルを持っていた側面をみた上で、ブランショにとっての「パンセ」が、いわゆる文学の言語にも敷衍されている点を、『終わりなき対話』収録のテキスト「バラはバラであり……」（初出 1963）におけるアメリカの詩人ガートルード・スタインへの言及から確認する。そして、最後に、『謎のトマ』にデカルトを想起させる記述だけでなく、詩の朗読と結びつく古代ギリシア哲学への目配せが教育制度における学校の授業での哲学テキストの読解の描写とともに見られることを確認し、哲学と教育を結びつける路線がブランショに貫かれていた点を確認する。そこから、ブランショにとっては、言語によって考える行為そのものにおいて、確固たる一人称の主体のありようが揺らいでいながらも、それでもなお、考える「誰か」は絶えず措定されている点を、晩年に書かれたテキスト「誰？」（1989）における子どもの数え歌という言語活動への言及の分析から確認する。以上のように、ブランショとともに「パンセ」について考えることで、「思考」の問題が論証的な思惟にかぎらず、文学言語とも分かち難く結ばれている可能性が明らかになるだろう。

第2節 途切れ途切れの言述としてのパンセ

ブランショによる「パンセ」についての考えが最もはっきりと表れているテキストのひとつは、「パンセと不連続性の要請」（初出 1963）だろう。とい

うのも、「パンセと不連続性の要請」で語られているのは、パンセとは問いに対する答えを探求する方法だということであり、その方法とは、端的に言えば、どのような形式で言語を紡ぐかの作法である、とわかるからである。初出時のこのテキストのタイトルが、「パンセとその形式 (La pensée et sa forme)」であったことも、そのことを如実に示しているだろう。

ブランショによってまず確認されているのは、論述のような言論の形式が教育制度に結びついているということである。そうして、ブランショはヘラクレイトスのような古代のギリシアにまで遡り、哲学とはいえ、断片的な私たちで「パンセ」が紡がれた時代があったことを見、またルソーの時代のように、哲学がむしろ作家と結びつき、大学の教育制度に回収されない例外が少なくなかったことを順々に確認してゆく。最終的には、大学教授方式においても、論証的な言述に回収されない不連続性があることを、アリストテレスにさえも必ずしも論証的とはかぎらない断片的な性質があったと指摘してゆくのである。古代インド思想、初期ギリシア哲学、トマス・アクィナス『神学大全』、モンテーニュ『エッセー』、デカルト『方法序説』といった例示をしながらブランショは哲学史を振り返り、ヘラクレイトスの頃には「対話」というよりは「知的な会話」が「授業」=ロゴスであり、ソクラテス、プラトン、アリストテレス以降に教育が哲学と結ばれ制度化されていったことをまとめる。そして、17世紀、18世紀には、教員ではないデカルトやスピノザがあらわれ、とりわけパスカルについては、彼の「言述 (discours)」が「分かれる-流れ (dis-cursus)」であって、「統一を欠いており、中断を含んでいるとぎれとぎれの流れ」⁵⁾という断片としてあらわれ出ることを強調している。興味深いのは、『パンセ』で知られるパスカルにかぎらずに、そもそも「言述」がそのもともとの意味からして途切れ途切れの性質を持っているのだと考えてゆく点である。ブランショは、18世紀には、書くことと哲学が結ばれてゆく流れを見、そして、カント以降に哲学者が大学教授となる点を指摘し、教授形式によって「パンセ」が完遂されるようになる経緯を、

ニーチェやキルケゴールといった例外に目配せしつつも、ハイデガーに至るまで俯瞰する。

その上で、ブランショは、どの時代にも共通する「探究の人間 (homme de la recherche)」の形式的な可能性を次のようにまとめている。

1. 教える。
2. 学者であり、その学知は専門化した探究の、つねに集団的な形式に結びついている (精神分析——非 - 科学の科学——、人文科学、基礎的な科学的研究)。
3. 自らの探究を政治的な行動の肯定に結びつける。
4. ものを書く。教授、実験室の人、実践の人、作家⁶⁾。

そして、「教える」行為が「話す」ことと結びついていることを見た上で、ブランショが自分自身の時代によりいっそう引きつけて記述するのは、大学教育における師弟関係の学びが、理解可能な知識の一方的な教授ではまったくなく、むしろ逆に、両者のあいだには絶対的な分離、無限の隔たりがあり、師とは「未知 (l'inconnu)」であり、師弟関係とは未知との出会いであるということである。このテキストで、ブランショは、こうした「未知」の探究が失われ、形骸化しているということで、教壇に立つ哲学者による講義形式の哲学を批判していると言えるだろう。そのようにして、ブランショは、哲学と教育が結ばれていることを前提としながら、そして、師弟関係がそこにあることを認めながら、その両者の関係とは、あくまでも未知なるものが賭けられる「無限性の関係」であるというのである。これに関して、ブランショは、「ねじれ (courbure)」、それから、論理的な一貫性という連続性の要請の他方にある、根源的な断片が要請されていることを主張する。終盤では、ロートレアモンやプルースト、ブルトンの名前をあげながら文学の言語にむしろ連続性への配慮があることを言うだけでなく、その手前で、アリストテレス

やヘーゲルについて、次のように書かれていることから、彼が「パンセ」に根源的な「不連続性」を希求していることがはっきりと見て取れるだろう。

まさにアリストテレスとともに、連続性の言語活動は哲学の公式的な言語活動になるのだが、この連続性は一方で、同一律、矛盾律、排中律という三つの律に還元される論理的一貫性（したがって単純な規定を持つ一貫性）の連続性であり、他方で、アリストテレスが創設する知の〈集成体〉が、よく統一されていない総体、集められた論述からなるちぐはぐな総体にすぎないという程度に応じて、そういう連続性は実際には連続的ではなく、単純に一貫しているわけでもない。したがってヘーゲルの弁証法でもって初めて、連続性が、自分自身を産み出しつつ、また、中心から周縁へ、抽象的なものから具体的なものへと移行しつつ、もはや単なる共時的総体の連続性というわけではなくなり、持続と歴史の「パラメータ（助変数）」を身に付けることで、運動状態にあるひとつの全体性として構成される。こういう全体性は、有限で完成しており、かつ無制限である——つまり、反復による同一性にしか満足しない悟性の原理に応えると同時に、否定による乗り越えを欲する理性の原理にも応える、循環的な要請に応じて、有限で完成しており、かつ無制限な、運動状態にある全体性なのだ。ここでは、はっきりと見られることだが、探究の形式と探究それ自身が合致している——あるいは、できるだけ厳密に合致しなければならないだろう⁷⁾。

ここから読み取れるのは、先取りして確認をしたように、ブランショ自身が、ソクラテス以降の論理学自体が断片的な記述を寄せ集めて作られた総体によって成り立っていると、すなわち、一貫していない不連続性をはらみ込んでいると考え、知が運動状態にあることに意義を見出していたからこそヘーゲルの弁証法を評価していたということである。さらには、ブランショは、

哲学だけでなく、エッセーや小説であっても、エクリチュールが連続性に満足をして、このような不連続性の要請に応えられていない現況を指摘するのである。このようにして、哲学における論証的な言語の運動としての思考の問題を、ブランシヨはヘラクレイトスやパスカルにかぎらず、ディスクール全般の問題として見つめ直す姿勢を提示していることがこのテキストからはわかる。

第3節 ブランシヨのエクリチュールの形式とパンセ

1. 対話体で語られるパンセ

ブランシヨの「パンセ」をめぐる記述が興味深いのは、それがブランシヨ自身の書き方の形式そのものを題材とする余地を大いに残しているからである。先に見た「パンセと不連続性の要請」では、よく読むと、ブランシヨ自身が、「わたしがいま書いているテキストにおいても、文章たちはほぼ申し分ない仕方で次々と続き、結びつけられる」⁸⁾と自己言及的に書いており、連続性に満足してしまっていることを示唆しているのだが、他方で、『終わりなき対話』自体に収録された彼の他のテキストには、論考と呼ぶことが躊躇われるような特徴をもつテキストが少なくなく、その特徴のひとつが、独特の会話体である。例として、最初に置かれている「終わりなき対話」(初出1966)の一部を抜粋する。

「会いに来ていただきたいなどとお願ひして、申しわけありません。あなたに言いたいことがあったのですが、いまはひどく疲れている感じがするので、自分の考えを言い表せないのではないかと思うのです。——「とても疲れていると感じるのですか？」——「それで、その疲労感は突然やってきたのですか？」⁹⁾

疲労をめぐる考えを話し合うこの者たちが何者なのかは判然としない。このように、誰と誰が語っているのか、そもそも、話している人たちが何人なのかもわからない形式が『終わりなき対話』には何度も現れる。そして、哲学という主題をめぐるのは、レヴィナスとバタイユに言及のある「未知なるものを知ること」（初出 1961）が知られているのだが、そのテキストさえも、書き出しはこのようになっている。

「ひとりの哲学者とは何か？

——おそらく時代錯誤的な問いだろう。だが、それでも、この問いに現代的な答えを出してみよう。かつてはこう言ったものだ、哲学者とはものごとに驚く人間である、と。いまなら、ジョルジュ・バタイユから言葉を借りてこう言おう、哲学者とは、怖がるひとだ (quelqu'un qui a peur)、と。

——とすれば哲学者は大勢いることになる。ソクラテスやアランは例外だけれど¹⁰⁾。

引用符からはじまり、引用符で閉じられるこのテキストでも、誰かわからない者たちが会話をしている。もちろん、「外」という激しい恐怖を経験することで「未知なるもの (l'inconnu)」と関係できると述べるこのテキストでは、「パンセ」についても、「怖がるパンセ、恐怖のパンセにしてパンセの恐怖であるパンセは、ある決定的な点へとわたしたちを近づけるのではないか」¹¹⁾と書かれており、すると、「未知なるもの」へと接近する「パンセ」を恐怖と結びつけている、とひとまずは読み取りまとめられるのだが、「パンセと不連続性への要請」と異なり、これを書いているのがブランショであるとは言い切れないのである。もちろん、このテキストを読むことで、考える営為が「恐れ」と結びつけられ、その「恐れ」が自らとはまったく他のものへと変質してしまうものであることは十全に伝わるだろう。しかしながら、

では、このテキストでそれを主張しているのがブランショその人であるのかは、疑問が残るのである。そのようなわけで、『終わりなき対話』はいわゆる哲学者と呼ばれる人たちの名前や概念が頻出する点で、「パンセ」について考える素材を多く提供しているとはいえ、そもそも誰がそのような考えを示しているのかについては、曖昧な部分が多いのである。

2. 断片的な形式の中で言及されるパンセ

ブランショ自身、『終わりなき対話』で幾度も繰り返し述べていたような断片形式を、他の著作でもみずから実践している。すでに虚構作品『期待／忘却』（1962）にて顕著になっていた断章形式は、そのあと、『彼方への一步』（1972）と『災厄のエクリチュール』（1980）に至って、極められる。そして、『災厄のエクリチュール』の冒頭では、「パンセ」について「災厄（*désastre*）」との関連から書かれている部分がある。

◆ 災厄。すなわち、狂ったパンセではないもの。おそらくはパンセがいづもその狂気を含みもつかぎりはパンセですらない¹²⁾。

◆ 考えること、それは災厄を下心（*arrière-pensée*）と名付けること（呼ぶこと）だろう。／わたしはどうやってそういう状態になったのかわからないが、おそらくついに、パンセからの距離に固執するに至ったのかもしれない。というのも、パンセはそれすなわちパンセを与えるのだから。けれどパンセへとまっすぐ向かってゆくこと（端の、淵のあのパンセの類の形で）、それはパンセを変化させることによってしか可能ではないのでは？ そこから次の命法がやってくる。パンセを変えるな、できるならば、パンセを繰り返せ¹³⁾。

◆ 考えないこと。すなわちそれは、無遠慮に、過度に、パンセからの激

しく心を乱す逃走の中にあること¹⁴⁾。

『災厄のエクリチュール』では、「災厄」について、アウシュヴィッツを想起させる形で、ときに既出の雑誌掲載テキストを参照項なしに挟み込みながら、レヴィナスやバンヴェニストやさまざまな人物名も挙げながら、ブランショの考えが読み取れるようにはなっている。ただし、この断章形式もまた、対話体のテキストとおなじく、誰が語っているのかは、不明瞭である。抜粋した箇所からは、たしかに1980年に至っても、考えることについて、ブランショが探究を続けていたということがわかる。その際に、「パンセ」が「災厄」とは区別されていることがわかるだろう。さらには、「災厄」へと向かうにあたって、「パンセ」からは距離を取ろうと試みていることが読み取れる。そして、考えない、という営為は、パンセから逃走することになると述べられているとひとまずは言うことができる。そのような言語によって表象可能な「パンセ」の及ばない次元に、当時のブランショは至っていたのではないかと思われる。しかし、最初に確認をした「パンセと不連続性の要請」に比べると、ずいぶんと書き方が異なり、これらをブランショ自身の主張であると明白に抽出することは困難であると言えるだろう。そのようなわけで、「パンセと不連続性の要請」に見られた「パンセ」を論理的ー貫性の担保された哲学にかぎるのではなく、むしろそのような哲学言語にさえも不連続があり求められるのだというブランショの姿勢、「パンセ」を文学にも拡張して言語の問題として考えるブランショの姿勢そのものは、彼自身の書き方の形式によって攪乱されており、考えとして一貫して記述されているとは言えないことは何度もでも強調する必要があるだろう。

3. 「バラはバラであり……」における「バラのパンセ」

『終わりなき対話』に収録された「バラはバラであり……」は、「未知なるものを知ること」と同様に、引用符で囲まれた匿名の人物間による対話で成

り立っているテキストである。したがって、これをアラン論と呼ぶことには留保が必要であるが、中心的に紹介されているのは、アランによる散文論であり、そこでは、「真のパンセ」とは展開せず、非連続なはずのものを次々と繋げてゆくものであるということが言われていた。それに際して、展開しない言葉として具体的に例示されるのが、アメリカの詩人ガートルード・スタインの『地理と戯曲』(1922)に収録されている詩篇「聖なるエミリー」の有名な一説「バラはバラであり …」である。

私はガートルード・スタインのある詩句を思い出す。「バラはバラは〔であり〕バラは〔であり〕バラである。(A rose is a rose is a rose is a rose.)」なぜこの詩句は私たちを動揺させるのだろうか？ それはこの詩句が倒錯的な矛盾の場だからだ。一方では、この詩句は、そのバラについてはそれ自体という以外には言いようがないと述べ、かくしてそのバラは、美しいと名指されるよりも美しいものとして姿を現わす。しかしながら他方では、誇張的な反復によって、この詩句はバラから、それに本質的なバラという美しさを保持させるのだと自負していた唯一の名(「バラ」)の威厳まで取り去ってしまう。ここでは、パンセ、バラのパンセ(*pensée de rose*)が、あらゆる展開に対して実によく抵抗しており、それは、純粹な抵抗でさえある。「バラはバラである」、これが意味するのは、バラを思考することはできるけれども、それに関して何も想像することはできないし、定義することもできない(結局は、先に示唆したように、同語反復は定義することへのかたくなな拒否にほかならないのかもしれない)ということだ。しかし、「バラはバラは〔であり〕バラは〔であり〕……」のほうは、存在の命名と喚起の誇張的な性質を脱神秘化しようとする。バラの「である〔存在〕」と、バラをバラとして永遠に称える名は、互いに根を奪われ、多数のおしゃべりのなかへと陥ってゆく。そのおしゃべりはまた、あらゆる深遠な言葉、つまり、始まりも終

わりもなく語る言葉の顕現として生じているのだ¹⁵⁾。

「バラのパンセ」とは、反復によって生み出される展開に抵抗する「パンセ」のことである。「AはBである」といった定義から逃れ、バラがどのようなものであるのかを指し示すことを拒絶するだけでなく、「バラはバラである」という説明からさえも逃走している。ここからは、スタインの詩句から展開を逃れる「パンセ」が導かれており、「バラのパンセ」と呼ばれるそれは、終わりのない運動であって、そのことによって、何かを名指すことを逃れながらそれでもなお言語活動を行う詩的言語の可能性が示されていると言えるだろう。そして、少なくとも、ここには明確に、ブランショの「パンセ」がこのような否定型の反復を性質とする詩句にも敷衍されていることがわかる。

第4節 それでもなお誰かが思考していることについて

最後に、こうした言語そのものの問題として「パンセ」について記述するブランショが、考える「誰か」をいつも前提にしていたことは確認しておきたい。

1. 初期の虚構作品『謎のトマ』における哲学への言及とパンセ

冒頭で確認をしたように、ブランショは文芸時評以外にいくつもの虚構作品を残しているのだが、最初に出版された小説作品『謎のトマ』には、「わたしは思う、ゆえにわたしは存在しない」という記述があった¹⁶⁾。興味深いのは、主人公のトマを含む子どもたちが学校教育において、哲学者たちの考えを教室で覚えさせられたことを示唆する記述が本文中に見られることである。トマは死ぬことが不可能な、人間と非人間の境界を生きるような存在として描かれている奇妙な存在なのだが、初版の第9章では、そのようなト

マも、小学校で授業を受けていたことが書かれており、哲学のクラスに少年たちが参加していることが書かれていたのである¹⁷⁾。そして、同じく第9章で、死ぬことが不可能である、ということが述べられるとき、次のように、トマたち少年が学校でアリストテレスをはじめとする哲学者の名前とその思想を暗記してゆく様子が描写されている。

トマの仲間たちは、数々の幻想でいっぱいのおプティミストであり、世界の終わりを信じていた。彼らはさまざまな哲学体系を検討し、アリストテレスという名とプラトンという名を救う使命を帯びた人間の敬虔さでもって、教科書に載っているアリストテレス思想とプラトン思想の要約を暗記した。彼らはいくつかの不滅の詩を、方舟に運びこむようにして、記憶の中に運びこんでいた。そして自分たちが消えてしまう瞬間に、それらを朗唱し、無という真の後世へ伝達しようと決心していた。彼らはすでに死んでいる者たちと、はるか昔からすべてを生き抜いてきた者たちとしか交際しておらず、他人のテキストに付随していくつかの詩句が残っているだけのパルメニデスやエンニウスに特別な愛情を抱いていた¹⁸⁾。

この時点で、ブランショがアリストテレスやプラトンだけでなく、ソクラテス以前のギリシアの哲学者を哲学教育とともに考え、かつ、彼らの言葉の形式が、詩句とともに残されて、トマの学校時代に至るまで、朗唱して記憶に留められるような性質を持っていたと明示していると言える。初版におけるこれら記述は再版では削除されているが、『謎のトマ』が1930年代から書きはじめられていたことを考えると、若いときからブランショにとってこうした哲学者の名前や思想は身近であり、考えるわたしをめぐる記述が残ったことから、創作においてははっきりとデカルトの記述そのものを懐疑する視点を出していたと言えるだろう。

2. 子どもの数え歌のような言語活動と非人称性——主体のあとの「誰か」

『謎のトマ』の一文に見出される「わたし」という一人称の主体が言語によって思考をするやいなや、その「わたし」が存在しなくなってしまう事態は、1940年代の文芸批評にて、ヘーゲルとマルルメを援用しながら主張された、名指しによって現実の事物が実際のところは消失してしまうという、言葉と物とのあいだの絶対的な隔たりをめぐる彼の思考を先取りしているとも言えるだろう¹⁹⁾。では、しかし、そのようなブランショが、考える「主体」を否定していたかという、そういうわけではない。そのことがわかりやすく現れているテキストが、晩年1980年代後半に書かれた「誰？」という短い文章である。これはジャン＝リュック・ナンシーが編纂した論集『主体のあとに誰が来るのか？』（1989）への寄稿で、ブランショは大学のバカロレア試験の受験者と試験官を模した匿名の会話調で、フランス語の *Après le sujet qui vient* というこのタイトル自体にすでに「誰 (qui)」という関係代名詞のかたちで誰かが組み込まれている点を指摘する²⁰⁾。そして、このテキストの最後で、ブランショは、「きょうはわたしは誰？ (qui est moi aujourd'hui?)」と言いながら子どもたちが日によって次々と遊びの中で「自分」と「彼」とを入れ替えてゆく言語活動に着目し、ときどきはこうした子どもたちのようにあろうと呼びかけてテキストを結んでいる²¹⁾。このテキストでは、言語活動が非人称的であるというおなじみの記述があるにもかかわらず、このように述べられていることから、1980年代末に至っても、ブランショにおいては、考える誰かは措定されつづけていたと言える。

第5節 むすび

この論文では、ブランショが哲学者ではないながらも、戦後フランスの時代的な背景のもとに、哲学と文学の境界自体を揺るがす形で文芸批評を書くなかで、論理的な一貫性をもつ哲学自体が、じつのところは不連続性を抱え

込んでいることを指摘し、どのような形式で「パンセ」を紡ぐのかが問いの探究には関わっており、「パンセ」の「ディスクール」には断片的な形式がつねに要請されていると主張していることを確認した。ブランシヨ自身の書くことの実践には、それがみずからの主張であるのか、誰がそれを語っているのかが不明瞭な部分があるのだが、『終わりなき対話』では、そうした「パンセ」が、哲学と呼ばれているジャンルのテキストだけでなく、スタインのような詩人のテキストにも読み取られている痕跡を確認した。ブランシヨとともに「パンセ」そのものがどのようなものであるのかを見ることによって、これが言語そのものの、一筋縄ではいかない、必ずしも一直線ではない運動の問題と隣り合っていることが明らかになる。ブランシヨにとっての「パンセ」とは、未知なるものを探究する形式、すなわち書き言葉であれ話し言葉であれ、その探究に際して、言葉がどのような仕方で紡がれるのか、という意味でのフォルムの問題でありつづけていたのである。

注

- 1) 本稿は2021年3月27日に立命館大学衣笠キャンパスにて開催された立命館大学間文化現象学研究センター×東京大学共生のための国際哲学研究センター(UTCP)シンポジウム「ひとはいかにして思考するのか?——バタイユ、ブランシヨ、ナンシー」で筆者が行った口頭発表「ブランシヨとパンセについて」を論文化したものである。一般に開かれたテーマ提供だけでなく、事前の打ち合わせから当日の議論に至るまで、構成のためにご助力をいただいた山野弘樹氏、横田祐美子氏、伊藤潤一郎氏に感謝する。なお、ブランシヨのガートルード・スタイン論に見られる「思想(pensée)」の記述を同年発表の「思考と不連続性の要請」における記述と比較する本稿のアイデアは、2020年12月20日にZoom上にて実施された第2回表象文化論学会オンライン研究フォーラムで筆者が行った口頭発表「モーリス・ブランシヨの「薔薇の思想」——「薔薇は薔薇である…」(1963)における引用と声の創出」に際しての郷原佳以氏からの助言に負っている。記して感謝したい。
- 2) Maurice Blanchot, *Thomas l'obscur. Première version, 1941*, Gallimard, 2005, p. 304. モーリス・ブランシヨ『謎の男トマ——一九四一年初版』門間広明訳、月曜社、2014年、260頁。新版の該当箇所は以下。Maurice Blanchot, *Thomas l'obscur. Nouvelle version*, Gallimard, 1950, p. 114. モーリス・ブランシヨ『謎の男トマ』菅野昭正訳、『ブ

ランショ小説選——謎の男トマ・死の宣告・永遠の繰言』菅野昭正・三輪秀彦訳、書肆心水、2005年、135頁。以下、本稿では、引用の日本語訳については、既訳があるものについては既訳を使用し、該当頁を記してゆく。「思考」を「パンセ」にするなど、一部、文脈から、利用した既訳の表現を修正している。必要と思われる箇所については、括弧を用いて原語を挿入した。

- 3) 『フランス語宝典』の語源の項目を見ると、動詞 *penser* には10世紀の終わりには「省察する、なにかについて精神を集中させる」という意味があったと書かれている。*Trésor de la langue française.*, s. v. « penser ». そして、名詞 *pensée* については、最初の用法としては、1176年の *pensée* の意味「ひとが考えること (*ce qu'on pense*)」が挙げられている。*Trésor de la langue française.*, s. v. « pensée ».
- 4) とはいえ、たとえば、論理学の入門書では、哲学にかぎらず、「論理」が誰にとってもわかりやすく言葉を使うための「普遍性」を求めるマナーとして説明されていたりする。「どんなときでも、他人と言葉を交わすとき私たちは、最低限の筋道の立った言葉の使い方を互いに求めている。それは、たいていは普遍性とはほど遠いとしても、「人間」同士として言葉が通じるといふことの信頼をそこにかけている。言葉を曖昧にしたり、誤解を招く表現を用いたりすることは、言葉の使い方として一般的に避けるべきものとされている。「わかりやすく」言葉を使うことへのこうした日常的な配慮は、広い意味で「論理的」な態度とっていいのである」。篠澤和久・松浦明宏・信太光郎・文景楠『はじめての論理学——伝わるロジカル・ライティング入門』有斐閣、2020年、12-13頁。
- 5) Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969, p. 2. モーリス・ブランショ「思考と不連続性の要請」上田和彦訳、『終わりなき対話 I——複数性の言葉 (エクリチュールの言葉)』湯浅博雄・上田和彦・郷原佳以訳、筑摩書房、2016年、41頁。バルバラ・カッサン監修の『ヨーロッパ哲学語彙事典』では、*discours* については、「あちこちを流れ、すべての方向をめぐる」意味のラテン *discurrere* にもとづく *discursus* の転用であって、会話や対話の意味を持つのは遅く、哲学者たちは文やパンセが連続する秩序や方法を指すためにこの語を用いており、*discursivité* (論証的性格) がほとんど *rationalité* (合理性) の類語であるといったことが書かれている。Barbara Cassin (dir.), *Vocabulaire européen des philosophies*, Paris, Seuil/Robert, 2004, p. 322.
- 6) *Ibid.*, p. 4. 同上 42 頁。
- 7) *Ibid.*, p. 7. 同上、46-47 頁。
- 8) *Ibid.* p.9. 同上、49 頁。
- 9) *Ibid.*, p. x. 同上、16 頁。
- 10) *Ibid.*, p. 70. 同上、134 頁。
- 11) *Ibid.*, p. 71. 同上、136 頁。
- 12) Maurice Blanchot, *L'Écriture du désastre*, Gallimard, 1980, p. 10.

- 13) *Ibid.*, p. 12.
- 14) *Ibid.*, p. 13.
- 15) Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, *op. cit.*, p. 503-504. モーリス・ブランシヨ「バラはバラであり……」郷原佳以訳、『終わりになき対話Ⅲ——書物の不在(中性的なもの、断片的なもの)』湯浅博雄・岩野卓司・郷原佳以・西山達也・安原伸一朗訳、筑摩書房、2017年、114頁。
- 16) 主人公トマと彼の不死をめぐるのはしばしば言及されるが、ジャン＝リュック・ナンシーは、『謎のトマ』の初版にも新版にも見られるラザロを想起させる死者復活の記述の前後をめぐる、そのようなトマはデカルトの「わたしは存在する (*ego sum*)」から遠のいているのではなく、むしろ、「ある種の死んだわたしは思う (*une sorte de cogito mort*)」を経験しているのだと述べているのは、『謎のトマ』における「考える (*penser*)」をめぐるモチーフを肉体との関係に引きつけて読み解いている点で興味深い。Jean-Luc Nancy, « Résurrection de Blanchot », *La Déclousion*, Galilée, 2005, p. 138. ナンシーの身体論とキリスト教の脱構築に関連する『謎のトマ』読解については、最近では以下の第5章で触れられている。Leslie Hill, *Nancy, Blanchot—A Serious Controversy*, Rowman & Littlefield, 2018.
- 17) Maurice Blanchot, *Thomas l'obscur. Première version, 1941*, *op. cit.*, p. 120. モーリス・ブランシヨ『謎の男トマ——一九四一年初版』前掲書、94頁。
- 18) *Ibid.*, p. 127. 同上、100頁。
- 19) 『火の分け前』収録のもの、『カフカからカフカへ』(1981)にも再録されている「文学と死への権利」(初出1947、1948)を参照。
- 20) Maurice Blanchot, « Qui ? », *La Condition critiques. Articles 1945-1998*, Gallimard, 2010, p. 441. モーリス・ブランシヨ「誰？」港道隆訳、ジャン＝リュック・ナンシー編『主体の後に誰が来るのか』港道隆・鶴飼哲・大西雅一郎他訳、現代企画室、1996年、76頁。
- 21) *Ibid.*, p. 443. 同上、78頁。